

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24530975

研究課題名(和文) シャルル・ロラン『学校教育論』から捉えるフランス近代学校文化の形成

研究課題名(英文) Charles Rollin's views on education and the development of school culture in modern France

研究代表者

越水 雄二 (KOSHIMIZU, Yuji)

同志社大学・社会学部・准教授

研究者番号：40293849

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：パリ大学総長に生涯に二度選出された経歴でも知られるシャルル・ロラン Charles Rollin (1661-1741) は、1726～1728年に『人文学を教え、学ぶ方法 知性と心につなげて』(全4巻)を公刊し、1734年にはその『補遺』も刊行した。彼の著書は好評を博し、『学校教育論』という略称で呼ばれて19世紀後半まで国内外で広く読まれていった。

本研究は、そうしたロランの教育論の内容を日本では初めて本格的に検討し、19世紀前半までの受容を解明する作業も通じて、フランス近代学校文化の形成を新たに捉え直す試みである。

研究成果の概要(英文)： Charles Rollin (1661-1741), who is known also as two-time rector of the University of Paris, published "De la maniere d'enseigner et d'etudier les belles lettres, par rapport a l'esprit et au coeurs" in four volumes between 1726 and 1728 and its "Addendum" in 1734. Recognized favorably, his writings were collectively called "Traite des etudes" and maintained a broad readership inside and outside France until the late 19th century.

This study is the first serious attempt to examine Rollin's views on education in Japan, which at the same time aims to understand the development of school culture in modern France from a new perspective through the process of illuminating the public reception of his work before the early 19th century.

研究分野：教育学(西洋教育史)

キーワード：シャルル・ロラン 『学校教育論』 パリ大学 コレージュ 古典人文学 近代公教育 学校文化

1. 研究開始当初の背景

シャルル・ロラン Charles Rollin (1661-1741) は、17 世紀後半から 18 世紀前半におけるフランス教育史上の重要人物である。彼の著書の意義は、マルク・フマロリ編『近代ヨーロッパにおける修辞学の歴史(1450-1950)』を紐解くならば一目瞭然である (Marc Fumaroli (éd.), *Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne (1450-1950)*, PUF, 1999)。

しかしながら、日本における西洋教育史や教育学では、ロランについても、主著 *Traité des Études* についても、これまでほとんど論究されていない。例えば、フランス教育学会編『フランス教育の伝統と革新』(大学教育出版、2009)でもそうである。ただし、同書の第 2 部第 4 章「後期中等教育」では、綾井桜子が、19 世紀以降のリセ lycée において、「古代文芸のなかに普遍的かつ理想としての人間像を模索し、これとの関わりによって知的形成が可能になると考える」教養形成の伝統が形成され、それは「20 世紀半ばまで基本的には変わらなかった」と述べている (p.119)。こうした伝統の近代における出発点を探すならば、それがまさにシャルル・ロランの *Traité des Études* へと辿られることを、上記フマロリ編の研究書は示しているのである。

2. 研究の目的

17 世紀後半から 18 世紀前半にかけてフランスで活躍したシャルル・ロラン Charles Rollin (1661-1741) は、今日一般に、「歴史家、教育家」(『岩波世界人名大事典』第 2 分冊、2013) と紹介されている。しかし、日本ではまだ彼の教育論の内容は本格的に研究されていない。

ロランは 1726~28 年に『人文学を教え、

学ぶ方法 知性と心につなげて』*De la manière d'enseigner et d'étudier les belles lettres, par rapport à l'esprit et au cœur* (全 4 巻)を公刊し、1734 年にはその『補遺』も刊行した。これらの教育論は好評を博し、“*Traité des études*”(トレテ・デ・ゼチュード)という略称で呼ばれるようになり、19 世紀後半まで国内外で広く読まれていった。

本研究の目的は、そうしたシャルル・ロランの教育論の内容を検討し、19 世紀前半までの受容を解明する作業も通じて、フランス近代公教育および学校文化の形成過程を捉え直すことにある。

3. 研究の方法

(1)シャルル・ロラン教育思想の解明

これまで日本の研究では、ロランの著書が全体としていかなる内容であったか、具体的な構成が明らかにされていない。彼の教育思想に関する研究は、そのような基本的な内容確認作業から始めていく必要がある。

なお、ロランの著作は 19 世紀においても版を重ねており、それを筆者は入手している。普段のテキスト分析は手許にある 19 世紀版を使って進めるが、それを通じて注目された重要箇所を検討は、フランス国立図書館へ出張し、初版本などの内容と照合した上で行うこととする。

(2)ロラン教育論の受容と教育実態の変容

ロランの教育論が、18 世紀の公刊直後、18 世紀後半の教育改革の渦中、フランス革命期、ナポレオン時代から復古王政期へかけてという 4 つの時期に、どのように受容されていたのかを、各時期に特徴的な史料から解明する。これに基づいて、フランス近代公教育および近代学校文化の形成と見なしうる実態面での変容についても探っていく。

4. 研究成果

(1) シャルル・ロランの経歴と執筆の背景

1661年1月30日にシャルル・ロランはパリで生まれた。父親は刃物職人だった。ロランは少年の頃、ある修道士に才能を見い出され、奨学金を得てパリ大学に附属するプレシー=コレージュ Collège du Plessis で学ぶ道が開かれた。神学部へ進み3年間研鑽した彼は、1683年に母校プレシー=コレージュで第二学級の教師に採用され、4年後には上級の修辞学級担当へ昇格した。1688年には王立コレージュの雄弁術の教授に任命され、若くして古典人文学の第一人者の座へ上り詰めたと言える。1694年に彼はパリ大学の学長に選出され、3か月毎に再任を受けて2年間その職を務めた。

学長退任後、彼は1699年にパリ大学のボーヴェ=コレージュ Collège de Beauvais の校長となり1712年まで務めた。1720年にロランは再度パリ大学学長に選出された。しかし、信奉するジャンセニスム Jansénism が教会と王権から否定されたため、この度はわずか3か月で職を辞した。教壇を離れた彼は執筆活動に専念していった。1726年に公刊した教育論第1巻の献辞と予備考察によれば、同書の目的は、国王に感謝して信頼に応えるため、パリ大学のコレージュで行われている教育を提示することであり、若き教師や学生をはじめ、父親や母親たちに読まれることも狙っていたのである。

(2) 『学校教育論』 *Traité des études* の全体像

シャルル・ロランは古典人文学の該博な知識と自身の指導経験を活かして、中等教育段階に相当するコレージュでの教育内容と指導方法について論じ、さらに、幼児教育と女子教育に関する考察を『補遺』として、*Traité des études* の通称で知られる教育論をまとめ上げた。この書名に日本では定訳はまだ無

い。本研究は、ロランが全巻をコレージュで扱う教育内容に対応させて構成し、若い教師たちに読まれるよう望んでいたことに鑑みて、『学校教育論』という訳語を採用した。

「パリ大学は、フランス国王によって青年の教育に努めるために設立され、この仕事で大変重要な三つの目標を掲げている。すなわち、学問 *la science*、道徳 *les mœurs*、信仰 *la religion* の教育である」と始まる『学校教育論』は、フランス語の教育の必要性や歴史を学ぶ意義を説いた点、また、訓戒よりも良き模範の提示を尊重する指導方針などが特徴に挙げられる。全巻の内容は下表のように構成された。

【表】シャルル・ロランの教育論の構成

『人文学を教え、学ぶ方法 知性と心につなげて』	
第1巻 (1726)	
全巻の予備考察	
第1編「言語の知性」	
第2編「詩学」	
第2巻 (1726)	
第3編「修辞学」	
.....	
第3巻 (1728)	
第4編「歴史」	
.....	
第4巻 (1728)	
第4編「歴史」(承前)	
第5編「哲学」	
第6編「授業およびコレージュの運営」	
全巻の結論	
.....	
上掲書の『補遺』(1734)	
第1章「幼年期の子どもに適した訓練」	
第2章「女子教育」	

(3) フランス革命期公教育構想への影響

フランスでは1762年のイエズス会追放をきっかけに、教育の新たな制度化が社会問題となり、公教育をめぐる議論が活発になった。パリ高等法院の部長ロラン・デルスヴィル Rolland d'Erceville が1768年の『報告書』で述べた「教育計画」は、革命期公教育構想の原型を提示した内容と見なされている。彼が民衆へも学校教育を与える制度を唱え、考察の源泉をシャルル・ロランの『学校教育論』から汲み取ったと明記し、その著者を讃えている点は注目される。シャルル・ロランは歴史を根拠にして、学問の普及が人間をつくり変え、よき習俗と統治をもたらすゆえに国民の運命を決める、と説いている。これがロラン・デルスヴィルの公教育計画へ大きな示唆を与えたであろうと考えられる。

他方、全国聖職身分会議は、高等法院主導の改革による教育の世俗化を憂慮していた。その求めに応じて、1785年にル・ピュイのコレージュの校長プロワイヤール Abbé L. B. Proyart は『公教育論』を発表し、自らの発案で執筆した『助教員論』も添えた。助教員 sous-maître とは、当時コレージュの周辺に叢生していたパンション pension と呼ばれる寄宿施設で、生徒の生活を監督しながら補習も指導した教師である。プロワイヤールは、コレージュ教師の職務と心得を明示したロランの『学校教育論』に基づいて、助教員の課題と意義へと論を進めたのであった。

(4) 革命とナポレオン時代を経ての受容

フランス革命が幕を閉じる1799年に、『要約ロラン「トレテ・デ・ゼテュード」 若者・教師・家庭の父親のために』 *Abrégé du Traité des études de Rollin, À l'usage des jeunes gens, des instituteurs et des pères de famille* が出版された。著者は名前を掲げていないが、フランスが「数年にわたり公教育を欠いてきた」状況を打開しようと、「最

適で最も信頼できる指針」を要約したと言う。教育の目標について、ロランの原著は学問・道徳・信仰の三つを挙げていた。しかし『要約』は、三つの中から信仰は除外し、学問を民衆 *peuple* へも与えることと、心を善く育てることの二つを提示している。この事例は、革命期における公教育の非宗教化を求める主張を踏まえても、なおロランの教育論に学問と道徳の面では価値を認め、公教育のために利用した試みであったと解釈できる。

復古王政下の1818年、アカデミー・フランセーズがロランの顕彰を懸賞論文の課題とした。入選作サン=タルバン・ベルヴィル Saint-Albin Berville (1788-1868) 『ロラン礼讃』 *Éloge de Rollin* によれば、当時のフランス国民がロランに学ぶ意義は、古代の歴史を通じて祖国愛を心に刻むことにある。彼は公教育の最高位に就いて献身し、祖国のために市民を育てたと讃えられる。その仕事は「教育の学問」 *la science de l'éducation* を目的にしており、理性を墮落させる迷信や貶める熱狂を憎む彼にとって、キリスト教は道徳の完成である。このように信仰を尊重しつつ市民を育成したと解釈されたロランの教育論が、知の権威から高く評価されたと言えよう。

(5) フランス近代公教育・学校文化の形成

シャルル・ロラン『学校教育論』の内容を検討するならば、フランス革命前のアンシャン・レジム期における学校文化の伝統と、それを踏まえた漸進的な改革への志向とが、啓蒙思想期から革命期やナポレオン帝政期を通じて復古王政期へ至るまで、各時期の必要に応じて継承され続けていたと考えられる。この知見は、従来のフランス教育史が、啓蒙思想家の主張と革命議会での諸構想を近代公教育の出発点に据え、その歩みをアンシャン・レジム期の教育との大きな断絶の相の下に捉えてきた理解に対して、根本的な修正をもたらすものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

越水雄二、シャルル・ロラン『トレテ・デ・ゼチュード』の受容からみるフランス近代公教育の形成過程 革命期から王政復古期まで 教育文化, 査読無, 26, 2017, pp.22-43。

越水雄二、シャルル・ロランの教育論を日本語でいかに呼ぶか 通称 *Traité des études* の訳語について 教育文化, 査読無, 25, 2016, pp.72-82。

越水雄二、シャルル・ロランの教育論 フランス近代公教育の形成過程を考察するために 教育文化, 査読無, 24, 2015, pp.15-36。

〔学会発表〕(計4件)

Richard RUBINGER, 韓龍震, 辻本雅史, 越水雄二, Niels VAN STEENPAAL, 教育史研究の新たな船出 教育史研究はどこに向かうべきか, 教育史学会第60回大会シンポジウム, 2016年10月01日, 横浜国立大学(神奈川県横浜市)。

越水雄二、シャルル・ロランの教育論からみたフランス近代公教育の形成過程, 教育史学会第59回大会, 2015年9月27日, 宮城教育大学(宮城県仙台市)。

越水雄二、匿名の『公教育論』 *De l'éducation publique* (1762) に関する考察 フランス18世紀後半における公教育思想の展開をめぐる 教育史学会第57回大会, 2013年10月14日, 福岡大学(福岡県福岡市)。

越水雄二、シャルル・ロランの『学校教育論』(1726-1728)に関する考察, 教育史学会第56回大会, 2012年9月22日, お茶の水女子大学(東京都文京区)。

〔その他〕

ホームページ

同志社大学西洋教育文化史研究室「ヨーロッパの教育文化を尋ねて」, 教員の研究。

<http://ykoshimi.doshisha.ac.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

越水 雄二 (KOSHIMIZU, Yuji)

同志社大学・社会学部・准教授

研究者番号: 40293849